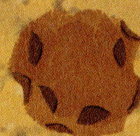


和菓子日和



片野望未

絵 佐々木真衣

大した理由は無かった。なんとなく甘い物が食べたい、という気持ちになり、駅のお土産屋さんに立ち寄って、ばら売りされているもみじ饅頭まんじゅうをなんとなく手に取った。店ではスナック菓子も売っているけれど、今はなんとなく和菓子が食べたい気分。全ては「なんとなく」で行動していた。

購入してすぐ駅を出ると、家に帰って食べるか、今すぐ食べるか悩んだ。空は青く晴れ渡り、太陽の反射で海が眩しいまぶ。決めた。外で食べよう。右手で軽く饅頭を握り、横断歩道を渡って海の近くへ向かった。

海だ！ という声が聞こえたのは、丁度ベンチに座った時だった。子供の声だ。どこかに家族連れの旅行者がいるのだろう。私のいる町は、観光地で少しばかり有名なところだ。



「おれ海って初めて見た。おお、あれが噂に聞く船か。想像してたのとちよつと違うな」

でもすごいなあ、と感嘆の声をもらしている。すごいのだろうか。私も船を見る。それから軽く周りを見渡してみたが、子供らしい姿は見えない。いるのは散歩しているおじいちゃんと、電話をしている背広姿のお兄さんだけ。少し遠くに、犬とじやれている人もいた。じゃあ今の声は誰かしらんと思つたら、再び同じ声が聞こえた。

「いやあお姉さん、おれを選んでくれてありがとうね」

声の発信源は近かった。私の右手から。先ほど購入したおみじ饅頭からだつた。



あまり驚かないんだね、と、もみじ饅頭は言った。少しがっかりしたようだった。

「おれさ、饅頭なんだよ？ いわば食べ物。それが話しているんだよ」

そうだね。と私は適当に相槌^{あいづち}を打った。海から吹いてくる風が涼しい。

「驚かないんだね」もみじ饅頭はもう一度言った。驚いてほしかったのだろうか。

「あ、わかった」

もしかして、夢だと思ってる？ 饅頭はニヤニヤした感じの声を出した。

「目は覚めてると思うけど、会話している時点で現実味が薄い」ああ、なんかしゃべっているなあと感じたくらいだ。それ以外に感想はない。

「お姉さん自体が冷めている」ぼそりとつぶやく声が手元から聞こえた。

そのもみじ饅頭は、聞いてもいないのにしゃべれる理由を教えてくれた。どうやら作られた時は、みんな話ができるらしい。饅頭同士でお互い話をした

り、時には作り手に体調不良を訴え、出荷から外してもらったりするという。また、饅頭が入る袋には饅頭たちが眠れるような素材が含まれており、入れられたらそこでみんな眠りはじめるのだそうだ。出荷され、店に出される時にはもう夢の中。だから普通は話さない、という。

「じゃあどうしてアンタは寝ていないの」素朴な疑問だ。

「袋に含まれる素材には偏りがでちゃうんだ。多い時もあれば少ない時もある」

大概是少し含まれていれば眠れるらしいのだが、あまりにも少なすぎると、こうしてたまに、なかなか眠れない奴が出てくるという。

「ものすごく食べにくいんだけど」しゃべられると。

「大丈夫、ずっと寝ない奴はいないんだ。お姉さんが袋を破くころには、おれも疲れて寝てるさ」

「じゃあアンタが寝るまで私は饅頭を食べられないのね。」

ならば家に帰って食べるしかない。私は立って、

家のある方へ足を向けた。

「ちよっと待って」

お願いがあるんだけど、と饅頭は言いだした。
「おれさ、色々みんなから聞いて知ってるんだ。
こここの場所って有名なんでしょ」

そう言うのと、いくつかの建造物や、有名な
作家などの名前を口にした。饅頭はどうやって
そんな情報を仕入れるのだろうか。聞いてみる
と、まんじゅう情報網や、和菓子ネットワーク
だよ、と返ってきた。何だそれは。と思ったが、
深く考えるのはやめた。

「それでお願いつて何よ」

「行きたい場所があるんだ」

なんて面倒くさい饅頭だ。そもそも何で私
がもみじ饅頭のいう事を聞かなければならな
い。饅頭は買われたら、おとなしくお腹に直
行すればいいのだ。

「私にメリットが無さそう」



そう言うのと饅頭は、低く間のびしたうなり声を出しはじめた。どうやら何か考えているらしい。やがて、「ひらめいた!」という声が聞こえた。

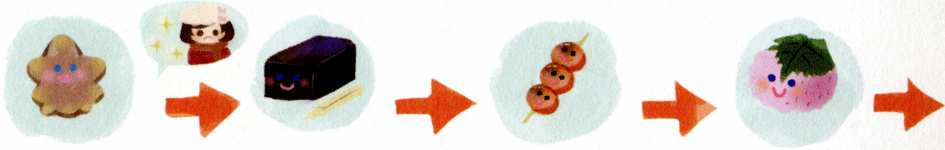
「和菓子ネットワークに、お姉さんの情報を流してあげよう」

名案だ、とても言うように堂々とした口調だった。そしてとても偉そうだった。だから和菓子ネットワークって何。

「そこに私の情報が流れるとどうなるの」
「和菓子の中でお姉さんの評判が上がる」
「どうでもいい。心底どうでもいい。そもそもどうやって情報を流すのか。」

「二応流せるには流せるんだけど。なんて言ったら良いのかな……」

説明できない事であるよね、と饅頭は言った。



饅頭の言っている場所は、今いる場所からとても近かった。信号を渡って左の道。商店街へ向かう道だが、店の並んでいる場所まで行かなくて良い。

「なんだって林芙美子の像なのよ」

結局言われるままに足を運び、彼女の前で足を止めた。改めて像を見る。少し高い位置に、澄ました顔でしゃがんでいる。隣には鞆かまどと傘。目は通行人に向いているが、おそらく制作者は海に向けたつもりなのだろう。

「おれ、この人、ハヤシフミコサンの作品、聞いたことがあるんだ」

それで気に入っちゃったんだ、と言う。どうやら和菓子の世界にも、人間の文学は知られているようだ。

「まあそれだけなんだけど」

せっかくだから見てみたくて、と饅頭は照れくさそうに言った。

「見て満足した?」

「うん」

じゃあ帰ろう。私は再び足を駅へ向けた。それと同時に饅頭が、待って、と声を上げた。

「満足したんじゃないの」

「満足はしたよ、でも折角だから写真撮ってよ」

饅頭が何を言い出すか。そう思いながら周りを見渡す。人は少ない。商店街の方に目を向けると、同じく人通りは少ない。平日の昼間は結構さびしい。

「写真って、この像を？」

「ハヤシフミコさんと、おれ」

饅頭を、フミコさんの手か膝の上、または鞆の上に乗せる。そして私が携帯電話を構え、シャッターを切るために数歩下がる。はい撮るよ、と言った瞬間、自転車漕ぐ格好いいお兄さんが目の前を通り過ぎる。一瞬、変なものを見るような目で私を見る。

「というのが想像できたから、やだ」

「嫌な想像力だね」

撮ってくれないと和菓子ネットワークに言い付けちゃうよ。と、すねた口調になった。わがままな奴だ。「そこに私を言いつけるとどうなるの」

「和菓子の中でお姉さんの評判が下がる」

どうでもいい。心底どうでもいい。そもそも撮った写真をどうするんだ。そのネットワークに流すのか。しかし、千歩譲って撮ってやるにしても、ただ言われた通りにするというのはつまらない。

「じゃあこうしよう」饅頭に向かって言った。

林芙美子の書いた作品、一部そらんじられたら撮ってあげよう。像の足元の文章を見て思いついた事だ。返事を聞く前に、それが見えないように饅頭を両手で包む。

「あれ、そんなに良いのかい」手の中からニヤニヤした声が聞こえた。簡単簡単。じゃあこの町で書いた作品を言おうか、と意気込むと、一気に言い始めた。

―牛が見えた 牛が見える 去年振りに見るこの道の牛は夏が良い…

「ちよつとたんま」

どこの作品だ。違う、どこの情報だそれは。和菓子ねつとわーくという奴か。

「これはまんじゅう情報網からだよ」ネットワークじゃないよ、と言う。

それらは違うのか。どう違うのか。いや、それよりもとりあえず。

「フミコサンに謝りなさい」

ずいとう銅像の前に、饅頭に乗せた手を突き出した。どうして、と困惑しながらも、まんじゅうは像に向かって謝罪を述べた。同時に後ろで自転車が通り過ぎる音が聞こえた。

海が見え
海が見える

五年振りに見る

尾道の海は

なつかしい

林芙美子



結局写真を撮ってから家に帰ってきた。撮れた写真を見せると、饅頭は嬉しそうに声を上げた。

「これで満足して眠りにつけるよ」

その言い方はいかがなものだろうか。しかしようやく食べられる時がきたようだ。その前に二、三発ひっぱたいてやりたいが。そんな私の不満をよそに、饅頭はおどけるように言ってきた。

「お姉さん、おれと結構話をしたけど」

愛着とか湧いて、つい食べられずに賞味期限、切らさないでね。

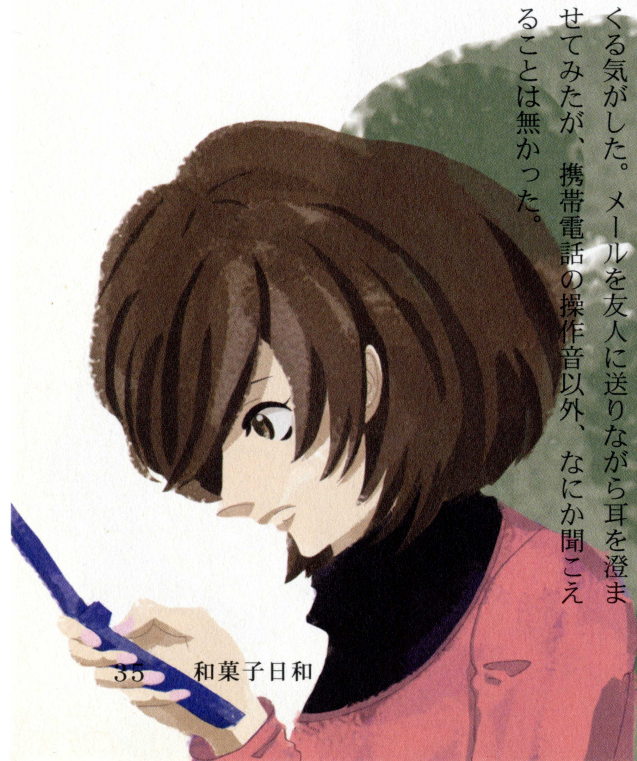
「現実味がずっと無かったおかげで、愛着がみじんも湧かなかった」ためらうことなく食べる、と返すと、それはそれで悲しい、と饅頭は言った。どこまでもわがままな奴だ。

「まあ楽しかったよ、ありがとう。じゃあ」

おやすみなさい、と言うのを最後に声は消えた。本当に寝たのだろうか。ためしに声をかけたり、振ってみたりしたが、まんじゅうは一言も発さなかった。寝たみたいだ。

じゃあ食べるかな、と思つて袋を開けようとして気づいた。つぶあんを書かれた文字が目に入る。こしあんの棚から取ったはずなのに、混ざっていたらしい。特に注意していなかったために間違えてしまった。私はつぶあんが苦手なのだ。

「近くの友人にあげよう」そう言つて携帯電話を取り出す。つぶあんも食べるよ、という声が聞こえてくる気がした。メールを友人に送りながら耳を澄ませてみたが、携帯電話の操作音以外、なにか聞こえることは無かった。



数日後、私は商店街をぶらついていると、はつき大福が売られているのを目にした。今まで売られている所がよく分からず、食べたことが無かったため、これは買うしかないと思った。店に入り、籠の中^{かご}にわさっと入れられている大福を見る。どれにしようかな。

「あ、あなた、知ってマスよ」

ふと、どこからともなく声が聞こえた。店を見渡したが、店員さんしかいない。忙しそうに何か伝票みたいなものを記入している。

「あれ、何処から聞いたの、だったカナ」

この感覚はもしや、と思う。大福の山に目を戻す。

「あ、情報かネットワーク、どっちか、だったカナ」

あなた、あれでしょ、と、声が言う。目の前の大福たちをじっと見つめる。

「つぶあん、とってもダイスキな人、でシヨ」

クスクス笑ったかと思うと、声はすぐに聞こえなくなつた。

